

■ 流行と不易 ■

秋の深まりとともに、生徒は冬服になった。私も半袖を仕舞い、今週から長袖をまとっている。2学期の中間試験から新人大会までのこの時期、学校は比較的落ち着いていると感じる。月初めから「いしかわ教育ウィーク」が始まり、それにあわせて、学校を公開している。特に、3日の土曜日は行事も多く、保護者をはじめ多くの方に来校いただいた。学校の様子を見ていただき、関心を持っていただくことはありがたいことである。

1年生が自作の明倫高校CMのコンペティションを行った。半年以上をかけて、「総合的な学習の時間」に取り組んできた。映像制作会社のプロデューサーから直接基礎を学び、実際に制作した映像をテレビ局に持ち込んで、意見や助言をもらい完成させた。

我々の世代とは異なり、今の高校生はスマートフォンを自在に使いこなす。画像も動画も生活の一部と言っていい。それでも、学校のどこに焦点を当てるか、視聴者の関心を引くためにどのように工夫すればよいか、そして何を伝えたいか。わずか15秒間に、オリジナリティーを出し、メッセージを埋め込むのは、そう簡単ではないはずだ。

作品の仕上がりは、私の予想を超えていた。コマ送り映像やLINEのトークを利用したものなど、若い感性が光っていた。生まれたときから情報端末が当たり前の世代は、これから来るAI時代の劇的な社会の変化にもうまく順応して行くのだろう。

P.T.A主催の講演会では、地元の化粧品会社ルバンシュの社長にご講演いただいた。5人兄弟の末っ子で、大学受験に失敗し、ただ一人高卒で就職。ある時、アロエクリームにアロエの成分がわずかしか入っていないことに驚いた。誰もが安全に使える化粧品を世に出すべきだと心に決め、25歳で起業した。コンセプトは、「食べられるほど安心」な自然化粧品づくり。開発品は、どれも口に入れて味移りや安全性を確認しているという。



企業がどのような人材を求めているかについて、ある食品メーカーの入社試験の話があった。午前の試験を終え、受験者が食堂で昼食を摂る様子を、社長がこっそり見ていた。みんなホッとしたのか、話しながら食事をしている。見渡してみると、一人の若者が目に止まった。一人だけ食事中にスマートフォンを触らなかった。会社はその若者を採用した。食品を扱う会社だからこそ、食べ物に感謝を示せることができる人物でなければならないと考えたという。

このくだりには考えさせられた。人は時代や世の中の変化に柔軟に対応して生きてゆかねばならない。しかし一方で、いつの時代にもどのような世にも共通の人としてのあるべき姿をなくしてはならない。我々は流行を追うばかりで、不易を見失ってははいまいか。人としてあるべき心を持ち続けよ、そのように生きていけば誰かが必ず見ていてくれる。そう教えられた気がした。